

(三)

## 武田ミキ先生のこと

桑 原 正 彦

「はあー、もうたいぎいです！」

亡くなられる前夜、武田ミキ先生が、ふともらされた。

十月初旬よりとみに弱られ、お好きな書もなさらなくなっていた。食事の量も少しずつ減ってきた。風邪をひかれたら大変だなと思っていた矢先のことである。

十二月に入つて、定期往診でお伺いしてみると、かるい咳をしておられた。いつものかぜ薬をのんでいたが経過をみることにした。十二月中旬になつて、右下肺に軽い気管支炎をおこされた。

右下肺は先生の泣き所の一つである。いままでに、この場所が何回肺炎になつたか数えきれない。その度に、先生の生命力と忍耐力できりぬけてきた。

四、ミキ先生とともに生きて

思えば、短大の幼児教育学科が新設されたのが昭和四十五年である。その翌年付属幼稚園ができ、小生の子ども三名が第一〜三期生としてお世話になった。

その頃から、保健室の神垣美代子氏と共に、先生の健康のご相談をさせて頂いていた。

脊椎カリエスの後遺症のこと、持病の高血圧の管理、風邪の治療、時には夜眠れないことなど、学長室にお邪魔しては、話し合った。

先生は、ご自分の健康には大変気を配っておられた。

「自分を大事にすること、長生きすることは、すなわち、武田学園のためになること」のお考えであった。

先生は極めて頑固で、自分のお考えをなかなか変えようとなさらなかったが、理を通してご説明すると、「わかりました」と、実行して頂けた。

リポピタン事件もその一つである。

先生の「頑張り屋」は有名であるが、食欲がなくて、ほとんど食べられなくても、リポピタンである。「リポピタンで生きているようなもんです」と。

一日数本も、ということがあり、血圧が上がったり、胃をいためたりされた。

晩年は、一切お飲みにならなくなった。しかし、しばらくの間、枕元には古いリポピタンがおいてあった。

先生は注射がお嫌いであった。

「注射は、いたいですけー」。

しかし、昭和六十年の夏は例外であった。

#### 四、ミキ先生とともに生きて

いつもの肺炎から、左肋間神経の帯状疱疹をおこされた。痛みと食欲不振、栄養不良でかなり弱られた。先生のお手はマシユマロのように柔らかく、静脈は極めて細くて、乳幼児用の針でしか入らない。この特殊技術をもっていたのは当院の看護婦、森本多恵子氏であった。

結局、約六か月間点滴を続けた。

先生は安佐市民病院が嫌いであった。

「建物を見るのもイヤなんです。じゃけー、前を通るときは、あっちを向いとるんです」

しかし、平成四年三月の、急性肺炎に心不全が合併したときは、そんなことは言っておられなかった。「じゃあ、おせわになります。」

岩森茂院長、奥原種臣副院長、浦城三四郎先生、主治医の江川博彌先生ら病院の総力をあげての治療が成功して、半年で退院された。

その後、新しいお家での生活が始まったが、次第に体力が落ちてこられた。特に、先生の本領である人一倍勝れた気力が、段々うすれてこられた。

ご自分でも「どうも、元気がでんのんです」と。

一人の高齢者の生活には、まわりの支援や協力が大切である。

その点、先生は幸せであった。

武田学千先生夫妻の愛情あふれる看病、豊後孝江先生を中心とした栄養管理チームの努力、晩年の一年余り、昼夜の看病をして頂いた大下昭子氏と寺岡百合子氏、そして先生を陰ながら激励して頂いた武田学園関係者の皆さん

など……。多くの方々の思いが結集してのチーム医療であった。

平成五年十二月二十七日は、生涯忘れがたい日になってしまった。そのお顔は、安らかであった。

女子教育における先生の業績はすばらしいものがあるが、先生は自分自身を教育することにより、さらにその真価を高められた。

合掌